

## 『第3回 メルマガ会員限定オンラインディスカッション』を開催

2023年2月13日、病院間の交流・情報交換のために第3回メルマガ会員限定オンラインディスカッションを開催しました。今回のテーマは、離床CATCHの運用／活用における【実運用／実活用】です。ご参加の施設でどのように運用／活用を行っているのか、当日の様々な議論の一部をご紹介します。

### 離床CATCHを「通知OFF」にした後の「通知ON」忘れについて

#### 【状況・課題】

- ONのし忘れが発生する主なタイミング
  - ・ 家族面会后 ・ 処置（リハビリ）時
  - ・ 食事時 ・ 患者がOFF（意図的 or 無意識）
- ONのし忘れ防止策として、そもそもOFFにはしないようにしている  
しかしその結果、鳴り過ぎの弊害がある
- OFFにはせず一時停止を活用するも、一時停止の時間が3分では短い  
→ 10分やリハビリの単位時間に合わせて20分などの時間設定があると良い



#### 【対策・取り組み】

- 患者さんのそばを離れる際には「通知ON」の指差し呼称を徹底
- 家族へは「面会後は一声かけてください」とパンフレットやポスターで呼びかけているが、声をかけずに帰ってしまう方も多い

#### RoomT2からの共有

- 確認するタイミングをルール化、例えば検温後は通知ONであることを必ずチェックする、などと決めている事例もある
- 家族向けパンフレットは一方通行なので、カードを渡して帰るときに返却してもらうといった方法もある

### 離床CATCHの鳴り過ぎについて

#### 【対策・取り組み】

- カンファレンス等での設定の見直し、夜勤帯のスタッフから頻回に発報する患者の申し送り
- 定期的な確認：3日目、7日目などにアセスメントし、設定が適切かをチェック
- 始業時のラウンド：ペアで行うなど、複数の目で設定が適切かを確認して判断
- 発報が多い場合、見守りカメラで状況を見て、必要に応じて設定見直し



#### RoomT2からの共有

- フロー作成によってセンサー使用患者の適切な抽出を行い、念のための設置を減らしている施設も
- 体重設定や検知時間の見直しも対策のひとつ
- 昼夜帯での設定変更：日中は緩く、夜間は厳しめの設定
- 離床CATCHの解除基準を設定しておくことも重要  
→ まずは日中OFFにすることから始め、3日間様子を観察し、すべての条件をクリアしたら解除する、など
- RoomT2のWEBサイトに離床CATCH設定フローのサンプルを掲載している、参考にしていきたい

## 離床CATCHの同時発報について

### 【状況・課題】

- 昼間は優先順位がわかるが、夜勤帯はスタッフも少なく判断がむずかしい
- スタッフ同士の阿吽の呼吸に頼らざるを得ない（ステーションであれば順位が分かるのだが）
- ナースコールが鳴っているのか、離床CATCHが鳴っているのか、わからない

### 【対策・取り組み】

- ナースコールと離床CATCHによる発報の音色を分ける工夫で対応
- 日勤帯は、通知するスタッフを病棟ごとに設定：北病棟は北のスタッフのみ通知など
- 見守りカメラをあわせて使い、映像で駆けつけ優先度を判断：映像は業務効率率につながる
- インカムを活用して、スタッフ同士でコミュニケーションをとっている



## 駆けつけが間に合わないことについて

### 【状況・課題】

- 「発報したら駆けつける」を徹底しているが、無駄鳴りなどにより発報慣れしてしまっている実情もある

### 【対策・取り組み】

- 歩行器を傍に置いたり、介助バーを設置することで、患者の行動をサポートできるような環境づくりや、万一来てて 衝撃緩和マットを設置するなど、ベッド周辺の環境を整えることで対応している
- 転倒リスクが高い患者をステーション近くに配置している

### RoomT2からの共有

- 離床CATCHだけでは転倒転落は必ずしも防げないので、他製品とうまく組み合わせて使用することも重要

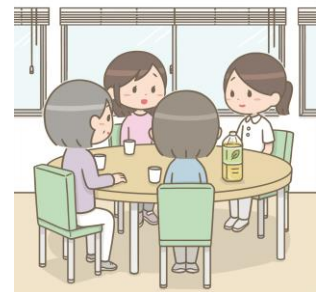


## 離床CATCHと抑制について

- 抑制とは考えていないため、同意書も取っていない施設が多数  
ただし、使用する旨の説明は実施
- 一方で、意味もなく、患者の思い（行動）に反するような設置は、抑制と捉えられなくもないため、同意書を得ることを検討している施設も

## その他：見守りカメラの併用

- どのような状況でコールが鳴っているのか確認できる→設定変更の参考にもなっている
- 転倒転落対策の一つの方法に成り得る
- 監視や拘束ではない、ADLを上げるため、安全のためのカメラであることを、家族にどう理解してもらうかが今後の課題
- 限られた病棟ではあるが、カメラを使用することに対してきちんと説明ができれば、患者／家族にも納得してもらっている



### 【杉山良子のコメント】

私たち看護の現場が、いわゆるモノに対する見直しをすべき時期に来ているのかもしれませんが。モノありきではなく、患者さんの安全性をどのように守っていくのか。そこにモノが入ってくるわけです。本日のディスカッションでも、モノに限らずコミュニケーションやスタッフの教育の問題もありました。転倒転落が抱えている課題は多々ありますが、ぜひ皆さんもモチベーションを高く持っていて、引き続きこのRoomT2にご参加いただければ幸いです。

